

しかし、薬害が出やすいとされ、特に柱頭や葉に薬液が付着すると処理量にもよるがその部分が枯死することもある。比較的安全なのは果梗部への塗布であるが、これとても塗布量の多い所はかっ色のはん点が現われるので処理濃度はもちろん、処理方法にも十分な注意が必要である。

以上のように本剤は安全性の面で問題が残されているが、処理をしない場合は全く着果しな

いこともありうることを考えれば、多少の薬害のおそれはあっても実用的効果は充分あるものと考えられ、問題点を詰める試験を並行して継続するかたわら、実用化も進めることになった。第10表では1%および3%の2水準に限定して試験されており、1%を実用化の濃度としたが、今後さらに低濃度処理、処理量と処理方法などを組み合わせて、薬害を防止しかつ効果の高い処理基準を追求する必要がある。

昭和47年度茶園関係除草剤・ 生育調節剤試験成績概要

農林省茶業試験場茶樹第3研究室長 青野英也

昭和47年度における茶園関係の除草剤・生育調節剤の試験件数は、除草剤5件(うち1件は前年度試験の継続観察のみ)、生育調節剤3件で、除草剤については茶業試験場、同枕崎支場、埼玉県茶業試験場、京都府立茶業研究所、滋賀県茶業指導所、宮崎県総農試茶業支場、大分県農業技術センター、三重県茶業センター、

福岡県農試茶業指導所において試験が行なわれ、生育調節剤については、埼玉県茶業試験場、奈良県農試茶業分場、岐阜県農試で検討を行なった。この試験成績検討会が、昭和48年2月17日茶業試験場で行なわれたので、その概要を報告する。

昭和47年度茶園関係除草剤・生育調節剤試験成績審査判定表

I 除 草 剤

薬 剤 名	有効成分及び含有率	判 定	内 容	委託者名
MB-206	3-(3,4-ジクロルフェニル) -1-メトキシ-1-メチル尿 素粒剤1.5%	実用化 ・ 継 続	実用化については18~21g/aの春 処理、幼茶樹の株元への施用はさける。 継続分については施用時期、散布方法と 茶の品質等について検討	丸 和 物 産
テトラビオン (フレノック液・ 粒剤)	2,2,3,3-テトラフルオールプロ ピオン酸ナトリウム(テトラビ オン)液剤30%,粒剤10%	継 続		ダイキン工業 住友化学工業

薬 剤 名	有効成分及び含有率	判 定	内 容	委託者名
HW-213 水和剤	N-(1-oxo-2-(3a,4,5,6,7,7a-hexahydro)-4,7methanoindanyl)-N'-dimethyl-urea50% 水和剤	継 続	対照薬剤CAT, リニユロン等と比較して著効がみられないので, 施用量を25g/aまで増量して継続検討	保土谷化学工業
MCC(粒状 スエップ)	メチル-N-(3,4-ジクロロフェニル)カーバメイト粒剤 15%	実用化 ・ 継 続	実用化については75~90g/aの春処理, 幼茶樹の株元への施用はさける。継続分については施用時期, 散布方法と茶の品質等について検討する。	スエップ普及会
DC-55乳剤 (ベスタック乳剤)	3,5-ジニトロ-2,6-ジメチル-4-ターシャリーブチル-アセトフェノン	継 続	イネ科雑草に対する効果が明らかでない ので, 継続検討	三笠化学工業

Ⅱ 生育調節剤

薬 剤 名	有効成分及び含有率	判 定	内 容	委託者名
アビオン-E200	パラフィン为主体とした乳化剤 パラフィン36%, 乳化剤その他64%	継 続	夏季実験の結果から蒸散抑制効果が認められたが茶葉に葉害のみられること, 寒干害の防止効果について未検討でもあり継続検討	アビオン化研
OEDグリーン	オキシエチレンナタネ油アルコール	継 続	冬季の寒干害防止実験のため未検討, 継続	日 研 科 学
ユニフェロン	不 明	継続?	定植苗の活着, 生育促進, さし木の発根促進ともに判然とした傾向がみられず継続検討	十 条 製 紙

I 除 草 剤

1. MB-206 - 土壌処理 -

担当場所 茶業試験場, 同枕崎支場, 埼玉県茶業試験場, 静岡県茶業試験場, 京都府立茶業研究所

5場所での試験結果から, MB-206の抑草効果は, 18~21g/aの量を施用した場合, メヒシバ等のイネ科雑草にみられ, 抑草期間も長い, 夏の雨の多い時期には, その効果がかなり落ちる傾向があった。

しかし, 18~21g/aの施用区は全般に抑草効果が高いので, この量を春処理に限って実用化することとし, 根に対する影響を検討し

た結果から, 定植間もない幼茶樹では, 株元近くに散布した場合葉害を生ずる恐れがあるので, この点は充分注意を促すこととした。

さらに夏処理については, まだ施用量等に関する問題があるので, 散布方法と品質などの検討とあわせて, 継続試験することとした。

2. テトラピオン(フレノック) - 茎葉処理 -

担当場所 茶業試験場, 滋賀県茶業指導所, 埼玉県茶業試験場

対象雑草であるササ, チガヤに対する殺草効果は, 茶試の場合非常に顕著で, やや遅効性であるが, 液剤散布の場合には, 14カ月経過しても発生をみなかった。また, 滋賀の試験結果

でも、剤形、濃度に関係なく有効であったが、カヤを除いて、ササ、チガヤでは低濃度の場合、多少残存するものがみられた。さらに埼玉の成績でも、各処理区とも無処理区と比較して効果が認められたが、剤形ではむしろ粒剤のほうが効果はまさった。また春処理と秋処理の効果比較では、滋賀、埼玉で春処理よりも秋処理のほうがまさることを報告している。

3. HW-213水和剤

担当場所 茶業試験場、京都府立茶業研究所、
埼玉県茶業試験場、宮崎県総農試茶業支場

a) 土壌処理

HW-213の土壌処理については、15、
20 g/aをメヒンバを対象としてうね間に施用して、対照薬剤CATと比較した。4場所の試験結果から、施用量の多いほど抑草効果はまさる傾向を示したが、CATと比較してそれほど顕著な抑草効果はみられず、また抑草期間も20日程度の場合が多いので、さらに施用量を多くした試験区を設けて、継続検討することとした。

b) 茎葉処理

HW-213の茎葉処理については、メヒンバの3葉期を施用時期として、土壌処理と同様の施用量、施用方法を取り、対照薬剤リニエロンと比較した。この場合も土壌処理と同様に、処理量が多くなるにつれて抑草、殺草効果はまさる傾向を示したが、対照薬剤と比較すると効果の劣る傾向が強く、さらに処理量を多くして継続検討する必要があるとの結論に達した。

4. MCG(粒状スエップ) -土壌処理-

担当場所 静岡県茶業試験場、大分県農業技術センター、三重県茶業センター、福岡県農試

茶業指導所、京都府立茶業研究所

粒状スエップを5場所でメヒンバを対象雑草として、60、75、90 g/a土壌処理し、対照薬剤CATと比較した。その結果施用量75、90 g/aでは各場所ともかなり抑草効果の高いことを認め、また抑草期間も長いので実用化が可能であろうと判断しているが、春処理と比較して夏処理の場合は、やや抑草効果の劣ることが指摘されている。したがって、春処理についてのみ75~90 g/aで実用化することとし、夏処理についてはさらに処理時期と薬量、ないし剤形などとの関係を、継続検討すべきであろうと結論された。

5. DC-55(ベスタック乳剤) -土壌処理

担当場所 宮崎県総農試茶業支場

ベスタック乳剤を150 cc/a 1回、または30日間隔で2回散布する区を設け、CATと比較した。その結果、処理後30日目の調査結果で雑草の発生本数が少ない傾向を示したが、抑草効果はそれほど顕著でなく、対照薬剤CAT以上の効果を示していないので、処理量、処理方法ともに再検討したうえで、継続試験すべきであろうとされた。

II 生育調節剤

1. アビオンE-200

担当場所 埼玉県茶業試験場、静岡県茶業試験場、奈良県農試茶業分場

アビオン-E200の蒸散抑制効果および寒干害防止に及ぼす効果を検討したが、寒干害防止効果については、現在試験実施中のため、夏季に行なった蒸散抑制効果についてのみ、その

試験成績を検討した。

すなわちポット栽培した幼茶樹についての試験結果から、奈良の場合はそれほど顕著な抑制効果が認められなかったが、埼玉、静岡の実験ではいずれも無処理区より日蒸散量は少なく、静岡では10、50倍液散布区で、この傾向が顕著であったが、埼玉では濃度による蒸散量の差は少なく、100倍液でも充分効果が認められた。

また、は場の枝条にアビオン-E200を散布し、枝条を切りとって重量減を測定した結果、各場所とも濃度の高いほど水分消失割合が少なく、この場合にも蒸散抑制効果のあることが認められた。しかし、静岡から夏季の散布では新芽の1部が褐変、落葉、あるいは薬剤が良くまざりにくく扱いにくい等の点で問題のあることが指摘された。さらに埼玉でも、濃度の高い場合には新芽の生長に影響のあることが指摘され、新芽の生長時に使用することについては、問題があるとされた。

2. OEDグリーン

担当場所 岐阜県農業試験場、静岡県茶業試験場、埼玉県茶業試験場

OEDについては寒干害防止効果の検討が目

的で、厳寒期の試験となるため、前年度の試験結果が報告された。しかし、昭和46年度の冬は暖冬のため、各場所とも明確な試験結果を得るに至らなかったが、静岡の佐久間試験地での成績では、幼木園の場合20倍液は寒干害発生株は皆無で、一番茶の収量も多く、OED散布の効果のあることが認められた。

3. ユニフェロン

担当場所 茶業試験場

生育促進剤ユニフェロンについて、さし木の発根、生育促進効果、および定植苗の活着、生育促進効果を検討した。その結果、さし木の場合のユニフェロンの効果は、24時間浸漬によってある程度認められるが、対照薬剤IBAに比して劣るとともに、24時間以上の浸漬が必要とされるのは、作業能率上好ましくないので、より高濃度での検討が必要であろうとされた。

また、定植苗の活着および生育促進についても、定植直後の葉面散布にやや効果がみられたが、かん注区は効果が判然とせず、根部浸漬区は明らかに生育が劣っていた。これらの試験から、この薬剤については、継続？ということにした。

昭和47年度桑園関係除草剤・

生育調節剤試験成績概要

農林省蚕糸試験場栽桑部 蒔 祐彦

昭和47年度の桑園関係除草剤および生育調節剤試験成績検討会は、昭和47年12月に例年のとおり東京で開かれ、試験担当場所ならび

に日本植物調節剤研究協会その他の関係者が出席して試験成績の検討を行なった。

除草剤は新規5点、継続3点、計8点で、生